1986

高崎高校同窓会報

発行所
高崎高校同窓会
〒370
高崎市八千代町
2－4－1
TEL
0273—24—0074

第20号　昭和61年11月30日

九十周年を前にして

同窓会会長　原　一雄

私達の母校高崎高校は、いよいよ来年は九十周年の祝賀の日を迎えることとなりました。この時に当り、本校に於ては、本年度の異動によって、水穴校長、小林教頭が転出され、新たに磯貝校長、根岸教頭を迎えたのであります。

わが高高は、前高と並ぶ県内での名門校として、過去歴代の優れた校長が配属されたのでありますが、その秀でた指導の下、数多い教職員の方々の限りない努力と、井上房一郎さんを始めとする同窓の先輩達の、母校を愛しての永年に亙る一方ならぬお力尽しによって、校風施設共に凜然として整えられ、正に県下は勿論、北関東に於ても、最右翼の傑出した名門校として、名実共にその栄を保持し続けておりますことは、誠に御同慶にたえないところであります。

観音山の麓である静寂な立地条件の良さと相まって、先輩達の力によって拡張された五万平方米に及ぶ敷地も、高校としては理想の姿に近いと言ってもよいのではないかと思われます。

来年は更に、九十年の記念事業として、翠巒会館の増改築を計画致しておりますが、近代的な設備を整えて、文武両道を目ざす高高の若い人達の、万全なクラブ活動のために十二分に活用して貰おうとしているのであります。九十年の小史の発刊と共に、記念式典も計画しておりますが、先輩各位の御推進御応援を心からお願い申しあげる次第であります。

毎年の同窓会の総会も益々盛んになりまして、常に六百名を超す状態となり、本年は五十六期の方々が当番として運営に当られるわけでございます。常任理事会、本部幹事会も適時行われまして、同窓会の運行の柱として定着確立しておるのであります。

また同窓会がお預りした基金により、先年財団法人翠巒育英会が発足しておりますが、本年はその本来の目的に添います地域の育英のためとして、高高ばかりでなく高崎市の県立市立の女子高からも、夫々一名の優秀な人達が選ばれまして、育英資金を贈ることができました。育英資金の金額は、未だ少ないとしても、その果す意義は重く、高高の目ざす一つの理想の実現の姿でもあります。基金もお蔭様で、その利子による剰余と、先輩からの毎年の御寄付により次第に増しつつある事は忝いことであります。

高校勉学の期間は短くとも、若い人のこの年代は、長い人生に於ての根本の基幹となる知識の学習と共に、人間としての剛健清潔な精神の背骨が作られる時でもあります。この清新な環境の中から、次代を担う人達が巣立ってゆくものでありますが、先生方のいよいよの御教導と先輩各位の温かい御指導御応援を願ってやみません。

高高同窓会報 No.20 目次

九十周年を前にして　同窓会会長　原　一雄　2
新任のごあいさつ　学校長　磯貝　福七　3
母校を思う　副会長　柴山大五郎　4
ごあいさつ　教頭　根岸　輝治　4
＊特別寄稿
ふるさとの誇り　亀田　東伍　5
私の北方物語　富田　賢二　6
教育の心　臼田　柳二　7
＊論壇
変わるソ連　新井康三郎　8
＊私の回想記 6
『蛍の光 窓の雪』　井上　安平　9
創立六十周年の思い出　斎藤　勝美　10
弁論部の仲間との昔と今　針谷　正紀　11
出会い　佐俣　一枝　12
＊卒業生の作品紹介 ②
内的風景と彫刻　深井　隆　10
＊ずいそう
「伊香保ロケーションで　久し振りの故郷」　堀川とんこう　13
＊同窓会だより
京浜同窓会の近況　中曽根信雄　14
高朋会だより　高橋　邦雄　14

新任のごあいさつ

学校長　磯貝福七

同窓会の皆様には、本校教育発展のため、常日ごろより格段のご尽力を賜り、誠にありがとうございます。衷心より感謝申し上げます。

この度、同窓会報に紙幅を頂きました機会に、紙上からではございますが、一言新任のごあいさつを申し上げさせていただきたいと存じます。

私は前任の水穴再喜校長のご勇退に伴い、本年四月、群馬県立図書館より本校に着任致しました。ご承知のように、水穴先生は、我々の等しく敬愛する県教育界の大先輩であります。本校ご在任中は、その手腕を遺憾なく発揮され、高崎高校の歴史に輝かしい足跡を残されました。その驥尾に付しまして、私も微力ながら光輝ある本校の前進のために、できる限り力を尽くしたいと思っております。

さて、わが高高は、創立以来九十年になんなんとする伝統を有し、政界・財界はもとより、官界、学界にもあまたの人材を輩出しております名門校であります。このように考えますと、高高の教育は、全国的な視野から、そして国際化社会の現在、世界的な観点から捉えられなければならないと思います。世上、教育論議がさまざまになされておりますが、我々もまた、高高の教育を不易流行の鉄則に鑑み、衆知を集めつつ押し進めてゆかねばならないと考えております。

高高にとって「不易」とは何かと申しますれば、それは、国家の発展を希求し、世界の平和に貢献する人材の育成でありましょう。本校伝統の3F精神は、そうした人格の形成に必要欠くべからざるものと思います。

では、高高にとって「流行」とは何でありましょうか。「十年ひと昔」という言葉がありますが、現代社会は、「五年ひと昔」といっても過言ではない激しい変化を示しております。我国は、第三の波にまともに洗われて、文明の大きな転換点に立っております。こうした激動期にあって、教育もまたいたずらに株を守るの愚を繰り返すことなく、二十一世紀を展望しつつ、厳しく自己変革を試みてゆかねばなりません。そのためには、本校生にも一段の飛躍を期待すると同時に、我々教職員も、学校運営のあり方を問い直し、また日々の授業の一層の充実を企図してゆく必要があると思います。「犬馬は難く、鬼魅は易し」とは、奇を衒うことのない日常の地道な努力を可とした言葉でありましょうが、教育活動は正にそのようなものであると考えます。

私は、「信頼と礼儀のある教育」をモットーに、一日一日を大切にした本校の教育活動を展開してゆきたいと思っております。

来年度本校は、創立九十周年を迎えます。同窓会の皆様の絶大なるご協力によりまして、翠巒会館の増改築を始めとする九十周年記念行事の計画が、着々と推進されておりますことは、本当に感謝に堪えません。

かつて、歌人与謝野晶子は、次のような歌を詠みました。

劫初より　つくりいとなむ殿堂に
われも黄金の釘一つ打つ

同窓の皆様方のご支援、ご鞭撻によりまして、私にも黄金の小さな釘の一本なりが打てますならば、これに勝る幸はないと存じております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

高崎市役所翠巒会　金井　重夫　15
四三会会報「のっつけ」　小澤　清　15
翠巒育英会の活動について　田端　穣　16
＊母校だより
運動部報告　中原射鹿止　17
学芸部報告　小笠原祐治　18
第40回高高・前高定期戦　山田　剛　18
最近の進学状況について　石沢　信久　19
土屋文明氏文化勲章を受章　12
翠巒文庫　17～19
会計報告　20
第八五回高高同窓会　新年総会へのお誘い　20
事務局だより　20

表紙写真提供　イワモト・フォト

母校を思う

副会長　柴山大五郎

同窓会の最近の大事業であります創立九十周年記念事業は残すところ一年に迫りました。実行委員会のご尽力と同窓各位のご理解あるご協力によって、計画は着々と進捗しております。また去る一月二十五日、高崎ビューホテルにて開催されました同窓会総会は、第五十五回卒業生の計画にて進められ、約八百人の多勢の出席を得て、和気藹々のうちに、談論風発、盛会裡に終了しました。このように同窓会活動が活発なことは誠にご同慶に堪えません。

一方母校においても、教職員・生徒が一丸となって、群馬のリーダー校の自覚のもと、自由と責任を明確にしつつ、勉学に励んでいることは力強い限りであります。同窓生は母校が健全に発展することを常に祈っているのであります。

母校が上和田町から乗附に移った昭和十二年頃は、学校の周辺を乗附・落合の部落の美田がとりまき、その先には歩兵第十五連隊の練兵場が広びろと烏川まで続いていて、春には雲雀が囀り、陽炎の燃える長閑な田園でした。現在は住宅に殆ど埋め尽くされてしまいましたが、それでも後に観音山の丘陵を背負い、学び舎としては最高の環境にあります。ここで学ぶ学生諸君、立派な人生観を持って、進学なり、社会に出られることを望みます。

私は業界の仕事で全国に出張することがあり、また役員会があると全国から集って来ます。そんな時に、私に向って、政治経済の現状、二人の総理大臣、群馬・高崎と話は進み、終に高高のことになります。二人の総理を同時代に輩出した高高は如何なる学校か、創立は何年かと羨ましがられます。子を持つ親として、進学の厳しい折から、優秀校に関心のあるのは当然でありましょう。また十五年程前に九州に出張の折、出身地を問われたので群馬県と言うと、何処ですか、東京の手前ですか、との言葉に驚いた。国定忠次と赤城山と説明して、初めて解った次第です。最近は先方から群馬県は好いですね、二人の総理が出た県ですもの、と言い、私が高高卒業だと言うと大変羨ましがられます。このように九十周年事業ができることも意義あることと思います。

最後になりましたが、同窓会と母校の発展を心から祈念します。

ごあいさつ

教頭　根岸輝治

このたび、四月一日付けをもって高崎高等学校の勤務を命ぜられました。

申すまでもなく、本校は明治三十年の開校以来、九十周年を迎えようという節目を来年に控えた伝統校であり、任務の重大さを痛感しております。

本校の第一印象は、校舎内の男子校独得の乱雑さと校庭に広がる豊かな緑が対照的なことであります。年輪を重ねたケヤキ、クスノキ、イチョウ、ヒマラヤスギ等の大木は伝統校ならではの立派なものであります。

また、着任以来短期間ではありますが、同窓会、翠巒体育会、運動部OB会、教育後援会、PTA等の各種会合等を通じて多くの同窓生の方と接する機会に恵まれました。いずれの方々もそれぞれの分野において立派な活動をなさるとともに、とりわけ母校愛が強く、母校や後輩のために御尽力くださる姿に深く感銘いたしました。県下でも比類のない、心温まる皆様方の御援助に対し深く感謝申し上げます。

先日ある同窓会の会合の折に、二七期のある方から「卒業期にちなんで二七本のヒマラヤスギを植樹したが、どうなっていますか」とのお尋ねがありました。その時は、あいまいな返事しかできず、失礼いたしましたが、その後、改めて調べてみると、植え込みの中の石碑に、「第二七回（昭三）卒業生有志、卒業三五周年にあたる昭和三八年植樹、ヒマラヤシーダー二七本、けやき二七本」と刻まれてありました。見事に成長したヒマラヤスギは初秋を迎え大型で赤紫色の球果（マツボックリ）をつけ、青空にそびえています。そしてその雄々しい姿は、かつての『乗附のヤマザル』の面影が薄れ、弱々しさの目立つといわれる最近の高高生に、もっとたくましくあれと語りかけているようにさえ見えます。

先輩諸兄に築いていただいた有形、無形の伝統が生徒達の人間形成に与える影響の大きさには計りしれないものがあると考えられます。この良き伝統を大切に育ててゆきたいと存じます。

今後とも本校の教育振興のため、校長先生を中心に職員と一体になり、全力を尽くす所存でありますので、一層の御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げましてご挨拶といたします。

●特別寄稿

ふるさとの誇り

亀田東伍

☆内村鑑三（うちむら・かんぞう）

一八六一―一九三〇。旧高崎藩士。札幌農学校。アーモスト大。萬朝報英文社説主筆。宗教家、評論家。

日清戦争で朝鮮を従属化した日本の次の目標は満州であった。日露戦争は、満州の利権をめぐる日露双方の側からの帝国主義戦争であった。政府は国民の敵愾心をあおり、ことに中国人民にたいする侮蔑の念をさらにかきたてた。軍国主義の風潮は全土をおおった。

このような大勢に抗して、非開戦を唱導した人の先頭中に内村はいた。

内村らは、萬朝報が開戦に傾くのに反対し、職を賭して非戦の信念を貫いた。内村はキリスト教の立場で、同僚の幸徳秋水、堺利彦は社会主義の立場で。彼らの識見は時勢にぬきんでていた。

内村以外にも、住谷天来、柏木義円（越後生れ。安中教会牧師）などのキリスト者が非戦を唱えた。

第一次大戦（一九一四―一九一八）でも、非戦を唱えるかどうかは、宗教の真偽を見分ける唯一の試金石であると、内村は反戦の立場を貫いた。

日本の帝国主義段階初期に、上州にも先覚者がいたのだ。中国侵略は、やがて太平洋戦争の発端になったことを考えれば、内村らの先見性は明らかである。

☆自由民権運動の志士たち

明治維新の大変革が、さらに主権在民の民主主義革命に発展するかどうかのカギは、明治十年代の自由民権運動の成否にかかっていた。全国的には植木枝盛、中江兆民らが指導者であり、各地に蜂起があい次いだ。

群馬での民主主義の中心勢力は、宮部襄、湯浅理兵ら群馬自由党員であり、茨城事件、秩父事件、飯田事件とあいまって、薩長などの藩閥専制勢力に衝撃をあたえた。彼らの主権在民の運動は、武装弾圧に敗北し、欽定憲法（主権在天皇の天下り憲法）が成立した（一八八九年）。だが自由民権運動は主権在民の新憲法（一九四六年）の先がけをした。

当時の指導者、および有名無名の先烈を郷土の誇りとして、秩父事件、群馬事件の百年を記念したのは、一九八四年のことである。

☆清水善造（しみず・ぜんぞう）

（一八九一―一九七七）

ウィンブルドン世界選手権大会（一九二〇年）で「世紀の巨人」ウィリアム・チルデン（アメリカ）と対戦した清水に、私が会ったのは、一九三〇年頃の京浜高中会の席上であった。

「あなたは、どんなお仕事をしていますか」「小学校教師です」「あなたは立派なお仕事をなすっている。私は社会に役立つことを何もしませんでした」。

短い対話であったが、私は清水の温顔と謙虚さを今も忘れられない。当時、後輩を「あなた」と呼ぶ人は、全くいなかった。そして、社会的地位や学歴の点で、卑屈な思いに悩んでいた私を、これほど賞め、はげましてくれた人も、清水以外にいなかった。

清水の思想経歴について、私は知らない。同窓諸兄のご教示をまつ。

☆「核兵器廃絶平和都市」高崎市

一九八六年三月五日、高崎市議会は「核廃絶平和都市宣言」を全会一致で採択し、全国の平和宣言自治体約千五十の仲間入りをした。

明治維新では、時代錯誤の佐幕派、自由民権運動では、高崎鎮台は、惨虐な鎮圧軍。日清戦争後は軍都（軍国主義の一拠点）であった高崎の、百年来の大変貌は、世界史の進路を正しく反映している。この決議は、米ソ両国の核対立の悪循環を断ち切り、偏狭な国家主義をこえた地球的意義をもつものといえよう。

私たちは、一九一〇年の日韓併合（併合という名の植民地化）の年に生れ、生涯の半ばは、相つぐ侵略戦争の中であった。もし、ポツダム宣言受諾による無条件降伏（一九四五年九月二日）がなければ、思想の転換はさらにおくれたであろう。

三八会清水・重田両氏の便り（一九号）によれば、四五名の貴い生命が戦争で失われている。他の年度にも似た状況があろう。核廃絶の宣言と行動こそ、非運にたおれた人びとへの無上の供養であり、子孫への贈物である。

私事にわたるが、安中市秋間と野殿の従姉の長男、後閑の疎開先の長男、私の次兄も戦禍の犠牲となった。

（中大真法会　27回）

●特別寄稿

私の北方物語

富田賢二

高中三五回では中曽根首相と同期で月とスッポンではあるが机を並べた。併しながら虚弱体質のスッポンは、二年なかばにして休学、卒業は三六回と普通の人より倍の友人を持つこととなった。

高中卒後、農芸化学を志したが、第二次大戦の戦雲急をつげ、学業繰り上げ卒業となり、アッツ島、キスカ島の玉砕が報ぜられた一年後、大戦の長期化を予測しての作戦であったのか、農芸化学の専攻を買われて、戦場での現地自活のための教育をうけさせられ、第五方面軍（北海道）の試験農場の技手の長として、占守島、幌筵島に派遣され糧秣本廠の仕事をさせられた。

アラスカ方面から連日時計の正確さで飛来するアメリカ軍の定期便の間をぬって、馬鈴薯や二十日大根の栽培をした。冬は黄変米（防空壕の中でかびてしまった米）を使っての焼酎作りや、あざらしの捕獲方法を研究した。あざらし捕獲は、肉を食べることもさることながら、その油を灯油として用いるために必要だったのである。北の海に現われる海象。群をなして島に休息にあがるあざらしを追って、兵隊五、六人を連れて捕獲に出かける。北海道大学犬飼教授の書物をたよりに、あざらしの頭を小銃でうち、傷ついて一度海に沈み、一瞬浮かび上ってくるところを捕獲するのだが、あたり一面が血の海となった。そんなある日、アメリカ軍の機銃掃射にあって、危くこちらが命を落とすところであった。

ただただ長期戦に備えての日々に、終戦の詔勅がくだる。隣りの島はその直後、ソ連軍の戦車によって全滅させられたが、幸か不幸か、私はこの島で武装解除され、ニコラエフスク（ソ連領、シベリヤ）に連行され、捕虜生活を送ることとなった。

二か月程は野外に於ての道路工事、年配者はその苛酷な労働に耐えられず病気になり、戦わずして命をおとすこととなる。労働と、心労と、加えて捕虜生活のぎらぎらした油の多い食事は、栄養失調者を続出させることとなり、困惑したソ連側が、誰か日本の食事味噌を作れる者がいないかと申し入れをして来た時、何故か肌身離さず、ずっと持ち続けてきた高峰氏・三国氏の生科学の書物が役にたち、ドロージ（ビタミン飲料）、味噌、もやし作りをかって出て、現地自活の場長としての責任を、とんだ所で果たすことができた。そんな生活のなかで、ソ連側から捕虜に対して共産主義教育がなされてきた。その教育を民主主義教育というわけだが、なんとしても納得できず、その教育に対して反対行動をおこしたため、監獄に入れられるはめとなった。十二月末のシベリヤの温度は零下十五度に達する。火の気のない監獄は、じっとしているとこごえ死ぬから、夜はさながら檻の中の熊のように歩き廻って暖をとり、昼間温度が五度位上がるのを待って仮眠した。現在の体力では、とても考えられないことであるが、若さがそうした困難を克服させた。高中時代の虚弱なスッポンは極寒のシベリヤの監獄生活にも耐え抜き、二度の投獄の経験の中で、最悪の条件の中での人の心の動き、正義も、ずるさもいやという程味わわされた。

私の戦争体験は武器によって傷つけ合うというものではなかったが、こうした経験は、その後の人生の生き方に大きな影響を与えている。

肉体的にも精神的にも虚弱ではなくなった。

二十二年十一月函館に帰国。何年か後に父の仕事をひきついだ会社経営の中で直面した労働争議。二十七年五月一日の東京のメーデー事件と時を同じくして我が工場をおそった争議の波風に、この捕虜生活体験がまことに役立った。

戦後四十年、いまだ北方領土問題は難問とされ、シベリヤはその開発が待たれるところと言われる。世界はめまぐるしく変遷し、核ミサイル等が論議の対象となるなかで、私の北方はいまだあざらしの血の海であり、冷たい監獄である。その中で農芸化学の分野が今、花ひらいていることには感無量である。

高中三五回で同期であった友は、今や国を背負う重要人物となった。現在その働きを助けたいと力一杯応援している私にとって、この北方に戦後総決算の春が訪れ、次の世代に一つの物語として語れる日のくることを願っている。（ラジエ工業株式会社社長　36回）

●特別寄稿

教育の心

臼田柳二

ノーベル賞の江崎玲於奈さんにお会いした時のこと、大学を志望する人の心構えについて、こうおっしゃった。

「小学校六年ではクラスで五番以内に、中学校では、その地域で最高の高校に入学すること、そして高校三年間は死に物狂いで勉強し、一流大学に合格すること、それが丁度一〇〇〇人に一人の割合になる。大学に入るということは学問で身を立てることであり、長い人生の中で、たった三年間を命がけになれないようでは学問で身を立てる資格はない」と。

もれた九九九人は大学へ進学しても仕方がなく、それよりもドイツのマイスター制度のような職業資格制度を導入し、それぞれに向いた職業技術を身につけさせてやることだという。

なるほど天才らしい切り捨て方だなと感じ入ったが、九九九人の一人としては双手をあげての賛意を表し得なかった。むろん、生徒自身に責任はある。しかし教育する側の責任はどうだろう。

文芸評論家小林秀雄さんと数学者岡潔さんが対談の中で、この点をこもごも鋭くついている。

いまは学問が好きになれるような教育をしていない。それは小中高校の先生方が学問を好むという意味をわかっていないからだ。人は極端になにかをやれば必ず好きになる性質をもっている。好きでやるのではなく、ただ試験目当てに勉強させるというやり方は人間本来の道ではなく、むしろ、その方が難しい。ところが学校は難しければ難しいほど面白いという教育をしていない。そこに問題があるという。

つまりは好きこそものの上手で、学問を好きになり、熱中するように仕向けていく、その指導力も欠かせない脇歯輔車の関係にあると考えているのだろう。

教師の指導力、生徒の熱意で十分な教育効果をあげられそうだが、私はもう一つの要素を指摘したい。

現代は衣食足りて礼節を欠く世の中だが、実はそれを一概に不可解な現象といいきれないのである。

わが国は神代のころから昭和三十年代の高成長期まで、いつの時代も大半の人たちは貧しさに耐え、飢えと闘って生きてきた。しかも現代よりはるかに礼節を知り、師弟や親子の絆も強かったように思う。いや、むしろ貧しい故に、乏しいが故に一層心をだいじにし、それに依りどころを求めたのかもしれない。

民族伝統の美意識「わび、さび」の原点も、ここにみられようか。

私たちが高崎中学に入学したのは、大東亜戦争さなかの昭和十八年であった。軍事教練やら農家への勤労奉仕、軍需工場への学徒動員と戦時二年半は学業を抛っての生活に明け暮れていた。その終局が敗戦である。わずか一日の間に、不変の価値がボロくずのようになってしまったのだ。

教師も生徒も方向を見失い、一時は右往左往、混乱を極めたものの、時代の嵐の中で教育者としての使命を忘れなかった一群の先生たち、大きな変化に柔軟に対応する若い生命力、そうしたエネルギーが教育現場の再構築に向かって、素早く動き出していた。

無明の時代の中にあって、いまは語り草となった、あの未曾有の食糧難にあえぎながらも、ほとんどの生徒は落後する事なく、学舎を巣立って行った。教師と生徒の心が、これを支えていたことは間違いない。

半ば落後しかかっていた私なども、今日どうにか社会人として身すぎ世すぎができるのは「教育は愛情なり」の信念をつらぬいたN校長の温情があったからこそであろう。

学業にいや気のさした私は、家業を継ぐということを理由に中退する覚悟で長期欠席していた。N校長はその私のもとへわざわざ足を運び「卒業だけはしておきなさい。いつかは必ず君の役に立つ」と渋る私をこんこんと説得して、卒業試験にのぞませたのである。N校長の親友で、戦時中に司政官としてビルマにおもむいたK教頭にも、私的にすばらしい情操教育をうけた。幾歳月心のふれあいをもったN校長、K教頭もすでにこの世にない。

命ある限り忘れ得ない師の面影は他にもY教頭、N先生、T先生…と数多い。

教育の原点はやはり愛情にあり、師弟の温かい心の交流であろう。私はそう信じている。

（上毛新聞社常務取締役総務局長　47回）

◆論壇◆

変わるソ連

新井康三郎

北方の隣国ソ連に新風が吹き出した。

どうやら史上初めて、ソ連首脳の訪日が実現することは間違いなさそうだ。これまで日本から、葬儀への参列を含めれば、四人の首相がモスクワを訪れているのに、ソ連の歴代首脳の誰一人として、重い腰をあげようとしなかった。対等な国家の付き合いとしては、きわめて異常な状態だった。それだけに、ゴルバチョフ・ソ連共産党書記長の訪日は、日ソ関係にとって画期的な出来事となるに違いない。

私がソ連とかかわり始めてから、かれこれ三十年になる。その間、二回、計八年間、新聞社の特派員としてモスクワで暮らした。その後も、何度か取材のためソ連を訪れている。ソ連のことなら表も裏も、かなりのところまで分かっているつもりだった。

ところが、ゴルバチョフ政権が登場して以来、私が長年なじんできたソ連とは、少々風向きが変わってきた。それは、思い切った若返り人事や節酒キャンペーンばかりではない。「情報公開」のスローガンの下に、ソ連の新聞が以前と比べて面白くなり出した。ソ連からやってくる学者やジャーナリストも、はるかに率直に物を言うようになった。

ブレジネフ時代末期、「ソビエトNOW」という企画記事で少々ソ連に批判的なことを書き過ぎて、私は一時ソ連入国を拒否されたことがあったが、いまでは似たようなことをソ連の新聞が書いている。チェルノブイリ原発事故や黒海での観光船沈没事故に関するソ連の報道も、西側の基準からすればまだまだ物足りないが、私がモスクワにいた頃と比べれば、大変な様変りである。

最近のソ連作家同盟機関紙に、日本国内のデモや集会ばかりに片寄った報道をして、ソ連国民の本当の関心に応える努力を怠った ― というモスクワ放送の元東京特派員の自己批判の論文が載った。かつてのモスクワ・テレビが放映する日本のニュースといえば、たいていデモや集会、さもなければ自衛隊の演習といったものだった。それで、日本人はみなハチ巻きをしていると勘違いしたソ連のテレビ映画の監督が、日本人役の俳優に無理やりハチ巻きを締めさせようとしたという笑い話があるほどだ。それはともかく、こうした自己批判が紙面に登場することと自体、モスクワの空気の変化を物語っている。

世論調査によれば、ソ連はいつも日本人にとって嫌いな国の筆頭にあげられる。ソ連の対日参戦のいきさつやシベリア捕虜抑留、北方領土への居すわりなど、その原因は多々あるが、ソ連外交当局者の無神経で大国主義的な対日態度も日本人のソ連嫌いを増幅させる一因だった。だが、木で鼻をくくったような態度のグロムイコ外相からソフトムードのシェワルナゼ外相に交代し、日本語に堪能なソロビヨフ駐日大使が着任して、ソ連側の対応の仕方も大分変わった。

ゴルバチョフ政権の対日重視の姿勢の背後には、日本の経済力や技術力をソ連の国内経済の停滞打開のために利用しようとする思惑や、あわよくば日米間にクサビを打ち込み、日本をソ連のアジア進出政策の足場としたいという狙いがあることは否定できない。ソフトムードの裏側のソ連の本質は不変であり、甘い期待は禁物だとの警告にも一理あろう。

しかし、日ソ両国はゴルバチョフ書記長の言うように「引っ越しできない隣国」である。日本が平和裏に生きて行くためには、日米、日中、日韓関係の強化ばかりでなく、日ソ関係の安定が絶対に必要である。幸い中曽根首相も日ソ関係打開に意欲を燃やしているという。

あまりに性急に事を運ぼうとして、ソ連に足もとを見すかされる愚は避けるべきだし、北方領土問題をはじめ、主張すべきことは断固主張しなければならないが、わが国としても書記長訪日の好機を利用して、ソ連からさらに大きな実質的〝変化〟を引き出すよう全力をあげるべきだろう。

（読売新聞調査研究本部主任研究員兼管理部長　51回）

6 私の回想記

●回想

『蛍の光 窓の雪』

井上安平

もともと私は幼い頃から学校の先生とお巡りさんとお医者さんが嫌いで恐かった。それが学窓の追憶を語る破目になったのだから皮肉というしかない。

さて我が四六会は、昭和十七年四月に入校し、昭和二十二年三月に卒業した。しかもその間、既に十七年の七月から農家への勤労奉仕が始まり、その内農家に月余に亙って、分宿する、農業奉仕に狩り出されること、前後十数回、そして遂に三年の十九年七月から二十年の八月十五日の終戦に至るまでは、軍需工場に工員として分散勤労動員された。従ってその間同じ学び舎に学び、同じ窓から外を眺め、共に机を並べて蛍の光で学ぶ事も誠に少なかった。当然「ジス・イズ・ア・ペン」も弱く、何時勉学したかの記憶も心細い。

されど、しかし当四六会はそれにもかかわらず、或る親愛なる先輩から「やくざ」の会と愛称を贈られた程の任侠に厚く、団結力の強い会であり、卒業後、疎開で途中入学した者、予科練に応募し三年で去った者、学制変更で四年で去った者、総てを集めて、年に数回の同窓会を開催し、東京でも年に一回は集まっている事は稀なるものと誇っている。中でも、昭和三十年頃から野球部の部員も少なくなり、その灯も正に消えかからんとする時に一人薄暮の校庭に立って、ノックのする市川先生の姿に打たれて、全く自発的に四六会の有志が図って四六会だけで、百五十名の後援会を結成して、月々百円の会費で現役の部員達にボールやバットを贈り、激励した思い出と活動には、今でも全く清々しい感動と感激を覚える、と世話役の小沢君や湯浅君はその感慨を語ってくれる。

もはや我々も齢重ねて往年の意気はなく、年々友人を喪っていく哀しみは深いが、たとえ時は短くとも、あの同じ小さい窓から身を乗り出して眺めた懐かしい光景について、語り合う時は何ものも忘れて楽しい。先般開いた同窓会でも、ただ一人御出席頂いた鈴木うらなり先生を迎えて私はこう挨拶した。「先生にとっては我々は全く未熟な少年に過ぎなかったに相違ないが、学びを共にする者として、一人の人間として接して下さったに違いない。今や我々は先生との年の隔たりは少なく、人の世の哀れも身に滲みて、これからは先生と生徒という関係でなく、お互い一個の人間として、友達としてお付き合い出来ることを願うものです」と。

改めて幼き頃この小さな窓から眺めた光景、かすかな蛍の光で共に学んだ事を大切にし、新幹線の如く、大きな窓から瞬間的に通り過ぎていく味気ない眺めの旅にしたくないと思うものも年枯れた者の感傷に過ぎないのであろうか。

（㈱高崎共同計算センター 取締役社長　46回）

●回想

創立六十周年の思い出

斎藤勝美

昭和三十二年は、高崎高校創立六十周年にあたり、記念式典や記念祭が挙行されたのですが、それに伴い、新校歌、新校旗が制定されました。

その年、私は生徒会長に選任され、その行事を担当したわけです。校長は田中悦平先生、生徒会顧問は高橋信男先生でした。当時は、質実剛健にして純情そのものだったとなつかしく思い出されます。

生徒会の活動については全て、生徒総会で決められ、それも生徒の独自性に任されて居りましたので先生方は、講堂に入れず、各入口には応援部員が固め、応援の練習同様、その時間中は出入禁止が通例だったと思います。応援団長は早川弘で、熱血漢でしたから、全ての行事に不参加は許されず、逃げようとすれば、これは大変な事でしたから、全校生徒は同一行動を取らざるを得なかったと思われます。

その生徒総会で、前夜祭の提灯行列と校門に杉のアーチを造る事が決められたのですが、杉のアーチは美観を損ねるという理由で先輩の井上房一郎氏の反対にあい、また、提灯行列は前例がないという事で諸先生方の賛同が得られなかったので、校長と生徒会役員の直談判になり、「生徒の総意で決められた事なので、もしこれが通らなければ、責任上総辞職せざるを得ず、校門のバラを切ってまで実行する」ということで、意気と情熱を吐露した訳で、それ程まで言うのであれば、「一切、校長が責任を取るから思う存分やれ」という事になり、実施されることになったのです。杉の葉は、榛名町の石井清一の実家から、トラックで運び、見事完成されました。全校生徒の参加するハリボテと提灯行列は、校旗とブラスバンドを先頭にして、市内を一巡しましたが、至る所で大歓迎を受け、興奮の坩堝と化し、帰校後のファイアーストームは、夜空を高く舞い上がったものです。

私事ですが、日本赤十字社から群馬県代表として、呉市のアメリカンスクールで日米高校生交歓会に招待された時、仙台の代表から「初恋の歌」(詠み人知らず)というのを教えてもらい、ファイアーストームで披露した訳ですが、これが全校に広がり、生徒会歌になる勢いでしたが、その後、マヒナスターズが「北上夜曲」として歌い、歌声喫茶などで大流行となってしまいましたから、気恥かしい思いをしたわけですが、本歌の〝俺は生きるぞ、生きるんだ。君の面影だきしめて〟という詩に、涙する純情な面もあったのです。

記念祭が終ると、生徒会役員、実行委員が慰労会を教室で行い、成功を祝ったのですが、赤玉ポートワインを買ってきて、いざ乾杯という時に、校長や高橋先生が入ってきて〝もう一杯飲めば、退学だ〟といいながら、一緒に大宴会になったのです。

運動部も各部共、大活躍の年でしたが、特に野球部は、細谷、田島のバッテリーで北関東大会決勝まで進み、惜しくも土浦一高に破れ、甲子園出場の夢を断たれたわけですが、当時ショートの本多は後年、母校野球部の監督を務め、数々の実績を残しました。

私が、東京トヨタ自動車に勤務していた頃、田中校長(当時上武高校校長)から、すぐ高崎へ来いということで、早川、上和田と一緒に先生の自宅へお伺いしたところ、高崎の現状を憂い、市長選に立候補するという胸中を話され、その話を肴にして、酒を飲み交わしたのですが、その時はもう体調をくずして、酒の飲める状態ではなかったのでしょうが、夜中まで議論したものです。東京へ帰って間もなく入院を知らされ、急ぎ飛んで戻ったのですが、その時はすでに亡く、ただ、酒飲み、涙の止どまることなく。

今思い出すまま。

(㈲ナショナル総業代表取締役 57回)

卒業生の作品紹介②

内的風景と彫刻

深井隆

この作品は、昨年一年間ほど文部省在外研究員として、英国に滞在し、帰国後に制作したものです。

作家と生活、作家と生き方は、作品に大きく影響するものだと思

●回想

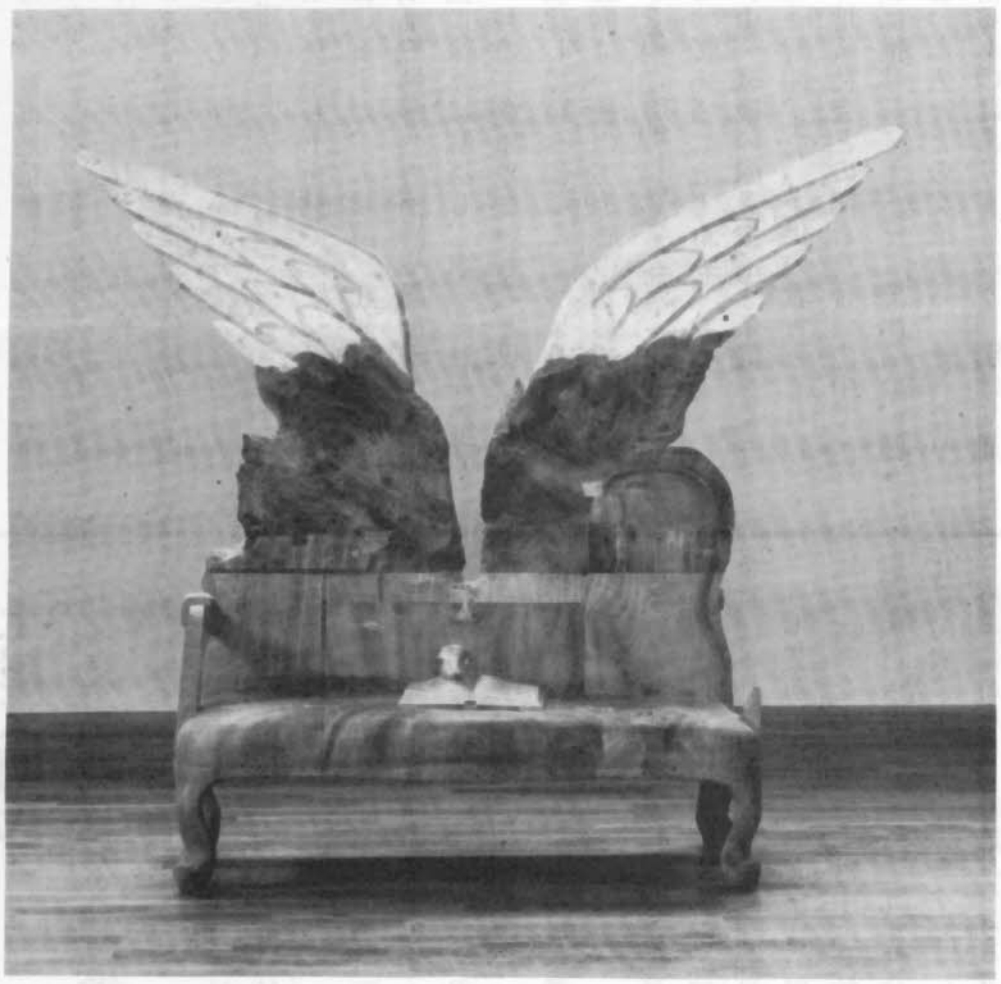
弁論部の仲間との昔と今

針谷正紀

高高を巣立ってから、はや二十五年になろうとしている。あの当時の自分と同じような年代の若者を教えるようになってから二十年たつ。私の在籍した昭和三十四年から三十七年の高高で学ぶことのできた最大のものは教師からでもなく、クラスからでもなく、弁論部の仲間及びその周囲との交流から得られた体験であったといえる。高校に入って一番やりたかった卓球を諸般の事情から断念した私を弁論部に誘ってくれたのが、中学時代からの顔見知りであった新町中出身の上原英敏君であった。

もともと話すことが嫌いではなかったことと、同時期に入部した連中が多彩な能力の持主が多かったことが魅力で、私はたちまち部活動に適応していった。活動のなかみは発声練習、弁論の原稿かき、討論、読書会、大会への参加が主なものであった。私が最も刺激をうけたのは昼休みや放課後の部室や護国神社芝生での仲間との談論で、その内容は政治、哲学、文学等、広範囲にわたり、ひとりひとりが自分の読んだ著書の感動を語り、恋愛体験を語り、社会批判を語るというものであったように思う。当時の私たちは、「三太郎の日記」や「出家とその弟子」などの大正教養主義の書物を競って読んだ。樺美智子の「ひと知れず微笑まん」などもまわし読みされた。しかし、今でも不思議に思うのは新聞部や歴研の仲間が安保闘争の影響を大きく受けたなかで、私たちは理論学習や討議はやったものの、政治活動に踏み出す者は皆無であったことである。仲間同士の交流は休日や夏休みの各自の家への相互訪問にも及んだ。一年の夏には八ケ岳、白樺湖方面の三泊四日のキャンプなどにも出かけ、友好を深め、絆を強めた。この頃から始めた新年会は各家庭持ちまわりで、卒業後の今も、毎年絶えることなく続いている。

今年の正月は我が家が会場であったが、十名集まり、恒例の近況報告から始まり、終日、飲み、食い、語りつくした。卒業後の私たちの進路はそれぞれ大きく異なり、社会的立場も異なっているが、激しい議論のあとも、昔と



います。刻々と過ぎゆく日々の在り様に、内的世界は築かれ、ある風景を作り出していきます。

作家の仕事は、この自己の内的空間に内在化された心象風景に形を与えることだと思うのです。そういった意味でも（私は木を主に素材としていますが）木と対話しながら、制作することが大切ではないかと考えます。

私の彫刻には、椅子・机・林檎・本・馬・柱などがモチーフとして使われますが、それらが私の内的風景として出現するのでしょう。

この金箔のはられた翼を持つソファーは「逃れゆく思念」と題しています。

（彫刻家・東京芸術大学美術学部彫刻科専任講師　69回）

同じようにしこりが残らない。この会の参加者は昔も今も実によくしゃべる。初めから終りまで、相互に話がとぎれることがない。それも、高校時代の思い出につきず、いまを、将来をどう生きるかということに焦点が定まっていくのが私たちの集まりの特徴だ。

●回想

出会い

佐俣一枝

三月一日、早春の陽射しの中、大勢の方々の祝福を受けながら、晴れの卒業式に臨んだ日の感動が今も尚醒めやりません。在学中、諸先生の日夜を厭わぬ親身な御指導と、向学心に燃える仲間と交流できた日々とを通じて「学ぶことの幸せと生きていくことの素晴らしさ」とを十分に味わい、加えて、齢五十路に近い私ながら一人の学生として、青春を謳歌できたことが私の人生の大きなモニュメントでありました。

「出会いを大切に」これはある先生のお言葉です。顧みると在学中、接した方々との触れ合いの一つ一つが、陰に陽に、私にとって「人生の糧」となっていました。町の広報で通信制の制度を知り、入学を志し、高校生活と学習に対する不安を抱きながら臨んだ入学式。その不安を払拭してくれるような先生のお話から、いつか私を学びの場に引き入れて下さったのです。

「学習の空白期間を云々するよりも、始めたら最後までやり遂げる強い意志が学習の基本的な心構えである」と。この言葉が通信制との出会いの第一歩でありました。

在学中、校長先生を始め、諸先生の「常に生徒の立場を理解して」の御指導によって、自ずとより充実した高校生活を過ごすことができました。

「親身な御指導」それは一面、自身を厳しく律する鏡でもありました。

また、合宿の夜、「皆、眠っているんですよ」と、夜更けて出入りを頻繁にする生徒に注意を促したT先輩の言葉遣いは、自らの生活を匂わすように、何と優しく、そして、説得力のあったことか。高高通信制に学んだからこそ巡り会うことができた先生方、数多くの仲間、その何れからも、教えられるともなく教えられた貴重な体験からの教訓を心に深く刻み込んでたえざる人生の道標とも指針とも致しております。

「上を見ても下を見ても切りがない」と言いますが、入学前、託ってきた私の生活や勉学への不満や愚痴が、入学を機に徐々に解消し、寧ろそれを愚かしいもの、意味のないものと思うように変化していきました。つまり、不満や愚痴は一種の劣等感の変形であり、それを第三者的に転嫁しようとする「ずるさ」であることもわかりました。

戦中・戦後の耐乏生活を余儀なくされた一時期、また、子供の教育とそれに伴う地域社会との関わり合いの中で、時代は推移しても、そこで出会い、触れ合った人々との交流から、それなりに得るものはありましたが、別けて通信制でのそれは大きなものでした。共通の目的を持ち、そこに介在する様々な悩みや問題点をさらけ出し、個人の枠を超えて誰しもの悩みや問題点として対応し解決してきたのです。

通信制での出会いの一つ一つを今後とも大切にし、併せて日々の出会いの数々を謙虚に受けとめていきたいと思います。今後とも御指導下さいますようお願い申し上げます。（通28回）

日常生活の大半が大学入試の呪縛下にあった高校三年間、弁論部活動は私のオアシスであり、その後の生き方を規定してくれた貴重なものであった。

（藤岡高校教諭　61回）

土屋文明氏 文化勲章を受章

土屋文明氏が文化勲章受章者に選ばれ、その伝達式が十一月三日に皇居で行われました。

氏は上郊村保渡田（現群馬町）のお生まれで、第八回の卒業生です。高中の国文の先生（村上成之）の紹介で伊藤左千夫宅に身を寄せ、一高・東京帝大に進み、大正五年に卒業されました。

長野県諏訪高女・松本高女校長、法政大学予科・明治大学文学部教授等を歴任され、現在日本芸術院会員。

日本芸術院賞、読売文学賞、現代短歌大賞などを受賞、宮中歌会始の選者・召人となり、五十九年には文化功労者に選ばれています。

長年にわたり、歌誌「アララギ」の編集発行に努め、実作のほかに歌論、万葉集の研究等においても多くのすぐれた業績をあげていらっしゃいます。

昭和二十年五月から六年半ほど吾妻郡原町川戸（現吾妻町）で疎開生活をなさったこともありますが、お住まいは東京都港区南青山三ノ八ノ一八です。ますますの御活躍を祈念いたします。（岡田豊治　55回）

◆ずいそう◆

「伊香保ロケーションで久し振りの故郷」

堀川とんこう

伊香保温泉の裏山のリフトに乗って山頂の展望台まで上がると、眼下の温泉街はもちろん天気さえ良ければ赤城山や前橋、伊勢崎までの広い眺望を楽しむことができる。

今年の五月、テレビ・ドラマのロケハンで私がそこに立った日は幸い良く晴れて、新緑の山々の眺めが素晴らしかった。

「俺が生まれた町は、この方角なんだが……」

とスタッフに言いながら視線を北に転ずると、まさかと思った中之条町が、幾重にも重なった低い山並みの向こうに見えた。山の斜面に貼りつけたような小さい町、町のすぐ後ろに番人のように立っている嵩山。

これは、ちょっとした驚きだった。故郷の町が伊香保から見える位置にあることを、私は今までついぞ知らなかった。

私は、中学を出るまで中之条で育ち、朝な夕な榛名山を見て暮らした。榛名山の見える風景を写生したことも何十回となくあり、今でもその輪郭を思い出して描くことができるほどだ。その榛名山の左手のゆるやかな傾斜の途中に、伊香保は見えていたことになるが。

あるいは、伊香保の展望台から中之条が見えても、その逆の眺望があるとは限らないかも知れない。あるいはまた、子供の目には雄大な山の姿は見えても、稜線にかすむ名も知らぬ町の気配は、見えなかったのかも知れない。

それでも、空気の澄んだ夜などには、遠い温泉町の灯は星のように輝いて見えたはずだ。

故郷の町から伊香保が見えることを私が知らなかったのは、じつは誰も私のまわりでそのことを話題にしなかったせいではないか。

私の驚きの中には、そのことが含まれていた。

さして遠くはない有名な温泉地のことを、そして目をこらすと榛名の外輪山が切れるあたりにそれが見えることを、私の両親も近所の人たちも私に話すことがなかった。

貧しかったのだ。

昭和二十年代には、私の親たちにとって有名な温泉町は無縁なものだったろう。まわってくる商人たちと、まれに伊香保のことを話題にすることがあっても、自分が家族をつれて温泉を楽しみにでかけるなどということは、思いもしなかったろう。伊香保は、あまりにも遠い町だったに違いない。

そんな想像は、いまの私にとって悲しいものではない。むしろほほえましい。

「どうします？　川も橋もないし、町並みは一本で単調だし。別の町、見ますか？」

と助監督が下りのリフトのなかで言う。

「いや、ここでいい。ここでやろう。……石段がいいじゃないか」

私は、多少の私情をまじえてそう答える。

「グッバイ・ソープガール」という、竹下景子さんがソープ嬢を演ずるシリーズ・ドラマの四作目は、こういう訳で伊香保ロケーションをさせてもらうことになった。

私がテレビ局にはいって、テレビ・ドラマの仕事をするようになって二十五年たつ。これだけの歳月が体の中を通り過ぎて行くと、いやおうなく私はテレビ・プロパーの人間になる。

名前をテレビではひら仮名で書くようになり、ソープ嬢を主人公にドラマを作ったりするようになった。どうしてそういうことになったか、それを久し振りにあった故郷の人々に説明するのは難しい。どの仕事でもそうだが、本人にとっては長い長い経過があって今の仕事に至っている。故郷の人々に説明するのは、気恥ずかしく煩わしい。

それで私は今まで、故郷でロケーションをするのをなんとなく避けてきたのかも知れない。

それを今年になって群馬で仕事をする気になったのは、やっぱり歳のせいだろうと思う。気恥ずかしさを捨てて、懐かしさに引き寄せられるままに故郷の山や川にカメラを向ける気になった。

思いがけず中之条の町が見えて、そこは高崎よりももっと気恥ずかしい故郷だが、中学校の校長が「お前たちのいた頃の古い校舎はまもなく壊される。ロケをやるなら今のうちだぞ」と言ってくれたのを思い出した。

（TBSプロデューサー　55回）

同窓会だより

京浜同窓会の近況

中曽根信雄

京浜高崎高校同窓会の大きな行事である総会並びに新入会員歓迎会は、五月二十九日、千代田区平河町の日本海運倶楽部で行われた。現在会員五十八名、新入会員六十三名が出席し、ほぼ例年どおりであった。本部からは原会長、新校長の磯貝先生を始め先生方がご列席になり、久し振りに母校の先生方と新入会員OBの皆様が話題に花を咲かせ歓談のひと時を過した。なかでも、新入会員に対する諸先生、諸先輩方の祝辞や激励の言葉は大変貴重なものであり、まことに有意義であったと思う。

もう一つの大きな行事は十二月三日の幹事忘年会であった。過去数年間はグランドパレスで行われたが、費用の関係や先輩方の中には和室を希望する方も多かったので、神楽坂の鳥茶屋で夜六時から開かれた。出席者は二十一名と人数の点では少なかったが内容は非常に楽しく充実し、出席の皆様からは大変喜ばれた。次の機会には是非三味線やギターなど、もっと盛大にやろうという声もあった。

例年の総会には必ず中曽根総理か前福田総理が交代で出席されていたが、今年は衆参同日選挙という特別忙しい政局でありお話を伺う機会がなく大変残念だったが来年は是非ご出席を頂きたいと思う。

昨年は筑波科学万博があり、高高の卒業生が関係していたので、いろいろと話題があったが、今年は余り特筆すべきものもなく淋しい気がする。

京浜高高副会長になられた岡本正巳先生（もと高崎経済大学学長）も、京浜同窓会の年中行事についてもっと日頃の親睦をはかりたいと……例えば囲碁大会など考えられていたようだが、また大変お忙しいようでなかなか実現致しません。

最後に母校の隆盛をお祈り致しますとともに校内幹事の先生方や編集にあたっている先生方のご苦労に感謝致します。

（一水会会員　京浜高高同窓会幹事長　39回）

高朋会だより

高橋邦雄

高朋会というのは、群馬県庁に勤務または関係する高高（高中）卒業生（在籍者）の同窓会である。現在会員数は三八六名で、その内訳は県庁（教育委員会事務局、各種行政委員会等を含む）職員三四三人、議員六人（国会一、県会五）報道関係一五人、県庁OB二二人である。県庁在職者の卒業年次は四五回から八五回に及ぶ。会員は年をおって増えており、今年は十一名の新鋭を加えた。しかし反面「星霜移り、人は去り」で、退職される人があるのは寂しいがやむを得ないことである。

このように会員が多くなり、しかもそれが県庁のあらゆる部局にいることになると、会の運営上組織を整備する必要が痛感されるに至った。そこで昨年、会長、副会長、主任幹事のほかにさらに各部局担当の幹事を置いて、会員相互の連絡を密にすることにした。県庁には県下各高等学校の出身者がいるが、こうした整然とした同窓会は、わが高高だけではないかといささか鼻を高くしている。

この会は、もちろん、会員相互の親睦をはかり、懇親を深めることを目的としたものであるが、母校の行うさまざまな記念事業や運動部の全国大会出場などの際は、できるだけ協力する

「ふだらく」（高高所蔵）
豊田一男（26回）

ことにしている。

高朋会の誕生はたいへん古く、いま手許にあるメモ帳を繰ってみると、昭和二十四年十一月に高中会を前橋市北曲輪町公民館で開くとあるから、このとき同窓会結成の話が決まったのではなかったかと思う。集まった人たちの中には当時教育委員だった竹腰俊蔵氏(のち知事、故人)教育長小島軍造氏(のち弘前大学学長、故人)等がいた。会が正式に発足したのは年が明けた二十五年一月である。(昭三十九年、京浜同窓会誌「翠巒」小生寄稿の「高朋会通信」)会長には上毛新聞社長の篠原秀吉大先輩(五回)が推され、小島軍造氏が副会長に選ばれた。「高朋会」という名称は篠原会長の命名による。会員数は結成当時は五〇名ほどだったから、今日はその八倍近くになったわけで、世の様の移り変りに驚くばかりである。

初めに高朋会員は県庁のあらゆる職場にいると書いたが、これを本庁の知事部局についてみると、八部五十六課のうち高朋会員がいないのは十課(うち四課は国の出先機関)だけである。これをみても高朋会員がいかに県政の各部面で働いているかがお分かりいただけると思う。

昭和四十六年篠原会長が亡くなったあと私が会長となり、現在副会長は横山巌君(三十八回、教育文化事業団理事長)幹事長は深堀正君(五十八回)で、幹事には若い諸君をお願いしている。

(28回)

高崎市役所 翠巒会

金井重夫

先日、市役所翠巒会の植原寅之助会長から、翠巒会について同窓会報へ報告しておくようにと言われ、いとも簡単に引受けてはみたものの、頂いた原稿用紙を見つめては後悔の念ばかりが先に立つ。今更断われば平常は柔和温厚な先輩だが、一喝されそうな気がして、果して会長の意に副えるかどうか不明だが、極く簡単に報告させて頂く。

市役所翠巒会は、高崎高等学校同窓会員である市役所(消防等を含む)の親睦と理解を深めることを目的として、昭和五十七年十月一日に組織された。当初の会員数一九〇人、現在は助役、収入役、市議会議員等の特別職を含めて二〇一人である。事業としては、㈠会員相互の交誼親睦を図ること、㈡母校の発展に資すること等である。

翠巒会の設立は、母校運動部等の活躍と大いに係わりがある。以前から市内所々で一年に一度ぐらい同窓生が一堂に会して意志の疎通を図る機会を持ってもよいのではないかとの声があったが、誰もが忙しい故か会を組織する迄には至らなかった。ところが、昭和五十六年春の選抜野球大会に野球部が甲子園初出場という快挙を果し、その後援資金の募金が行われた。翌五十七年夏はバスケットボール部が全国高校選手権大会に出場した。

庁内の幹事達が、同窓生名簿をもとにこれらの募金を集めるうちに前述の声が一段と大きくなり、翠巒会の設立となった。

翠巒会の総会は、毎年秋に開催されるが決算報告に会員兼顧問の議員の祝辞を含めて十五分位で終り、後は懇親会となる。

懇親会は大変な賑いで、特別職、一般職の別なく、上下わけへだてもない。平常勤務が異り会う機会も少ない同級生同志や顔見知りの先輩後輩が互いに盃を交し、果ては流行のカラオケも飛び出す。やがて、つれない中じめとなると全員が肩を抱き久し振りの応援歌となる。

歌い終って外に出ると、秋気にしみじみ在校当時が懐かしく、酔も手伝ってか明日からまた市民のために頑張ろうという気にもなるから妙である。

明年は母校創立九十周年記念事業が行われる。翠巒会もこれに若干の協賛募金をさせて頂いたが、同事業の進捗成功と文武両道を旨とする母校高高の益々の発展隆昌を祈念して已まない。

(49回)

四三会会報「のっつけ」

小澤清

昭和53年11月に会報を創刊、本年61年7月に9号誌発行。2号誌より5月末日原稿締切、7月中旬発行が定着、年一回欠かすことなく継続中です。体裁はA5判二段組、各号平均30頁位、同期生の他関係者へも配付。

昭和50年代に入り、即ち吾々が50歳を迎えてから同窓会の頻度が高まりました。心身の変化の予兆を覚え、過去を想い、先々への思案の中から「同期生の消息交換の場」として、会報「のっつけ」が生まれました。

始めてはみたものの原稿集めが容易ではない。幸い、東京在住者に熱心な幹事が居り、高崎と連繋プレーで企画、アイデアを寄せては号をまとめて来ました。要請した寄稿者の他に、毎回予期しない寄稿があり、安堵すること屢です。8号誌準備中、野口俊和(故人、高崎野口病院)君の提案で、近況欄に具体的な

条項（現職・近況・家族趣味・健康法・友人の状況・近影）を上げて募集した所、多勢の報告が寄せられました。在学時代の写真も併せて載せれば会報の意義が大いに上ると思います。

各号から一部を上げてみます。回想記に「汽車通碓氷組」（嶋村次雄）、交遊を偲ぶ「古い手紙」（中山治秀）、「高中時代の英語」（竹村文雄）、日記と資料を元に「実録笹の実採集と六里ケ原開墾」（須藤元夫）等々。敗戦前後の体験記 ― 海兵時代「ある青春」（猿谷明）、海軍水路部時代「戦いすんで」（鳥羽義一）、徴兵「最も長かった日」（渋井嘉寿夫）、新聞記者「かけ出し時代」（鶴田実）、農村医療「ジープに乗って三十年」（柄沢英作）、応援歌「翠巒影を」のルーツを探り問題提起（池田瑛）。企画として「恩師訪問記」「各小学校出身者別座談会」。特別寄稿に中川英一（故人）、長野浩、安居次夫、下山蔵吉諸先生、故藤本純助先生の奥様、高商出身の尾高一郎氏等々。追悼記も欠せない記事となった――「浅尾市之助先生」（村本守司、柳沢正昭）、中川英一、内藤由己男先生、亡き同期生。文芸面に常連、同期生の妻君から短歌の投稿もある。ご家族からの寄稿を積極的にすすめている。

同窓会幹事（斉藤達蔵、小澤清、島方庫司、谷内浩、鳥羽義一）が編集委員を兼ねている。

本年10月25・26日、草津温泉（一泊）で還暦記念同窓会を行う。来年は「のっつけ」10号誌発行予定、すでに準備に入っています。「3号誌で廃刊」の通説を乗り切ったものの毎回先の当があった訳ではありません。各期で会報発行をおすすめ致します。要は気張らず粘り強く。

（43回）

翠巒育英会の活動について

田端　穣

本育英会の昨年度前期の事業につきましては、同窓会報第十九号にて田中常務理事が報告しましたとおり本校生九名に奨学金を給付することで出発しました。ところが、家庭状況の急変により修学が困難となった本校三年生早川浩児・平井和明の両君について、昨年末学校長より奨学金給付の申請がありましたので、十二月より給付を開始しました。卒業目前で心配されましたが、本育英会の細やかな援助も一役買って無事卒業することができました。この奨学事業がこれほど速効的に役立つとは予想もしておりませんでしたので、関係者一同たいへん喜んでおります。また、こうした事態に即応できたのは地域、学校に密着した育英団体であるがためで、本育英会のあり方は今後の育英事業の一つのモデルになるかと思います。これにより昨年度の奨学生は十一名となり、奨学金総額は百十六万円になりました。

本育英会は三千万円の基本財産の運用により諸事業を行っておりますが、この程度の基本財産では低金利時代を迎えてその運用収入は心細いもので、基本財産の拡充は焦眉の急となっております。こうした事情を御理解くださった吉見東太郎(27回)、栗本正彦(29回)、原一雄(29回)、安藤文夫(32回)、海老原英吉(33回)、小山禧一(42回)の各先輩より合計七十万円の寄付金をいただきました。この寄付金は御意思を尊重し基本財産に繰入れることとし、これに昨年度の余剰金の一部を加えた三百万円を基本財産に繰入れさせていただきました。御協力をいただいた各先輩に心より御礼申し上げます。

こうして順調に事業をすすめて来ましたが、残念なこともあります。御存知のとおり本育英会の基本財産は、同窓会のクラブ活動振興基金として運用されてきたものです。この精神を生かすため本育英会では、学校教育補助事業として各部の全国大会出場に際して補助金を給付することになっております。しかし、残念なことに昨年度はこの補助金支出はありませんでした。各部の奮闘を期待しております。

本年度の奨学金給付事業につきましては、本育英会の公益性に鑑み地域の他高校生にも適用することとし、本年度は高崎女子高校、高崎市立女子高校より採用することとしました。これにより本年度の奨学生数は、昨年度からの継続受給者七名に本校一年生石田幸人、伊藤勇輝、菊池俊一郎、杉田光一、高崎女子高校青山利恵、高崎市立女子高校朝岡佳子の諸君を加えて合計十三名となりました。

なお、教職員の人事異動により本育英会の役員に欠員が生じましたので、磯貝校長を顧問に推戴し、根岸教頭が理事に選任されました。また、森川評議員の御逝去により規定数を割っていた評議員につきましては、規定数割れが生じないよう複数を補充することとし、小森谷久、天田允(47回)、小保方正彦、小泉信(54回)、石田安利、安藤震太郎(55回)の各会員が選任されました。

（財団法人翠巒育英会理事　54回）

母校だより

◆運動部報告◆

バスケット部関東〔Bブロック〕優勝
3競技関東大会へ出場

冬季種目のスキー部と、春の県高校総体でバスケット部と陸上競技部(三段跳)が関東大会の出場を決めました。

バスケット部は、関東大会(宇都宮)においてBブロックで優勝し、九年ぶり二度目の栄冠を勝ち得ております。

小沼洋一君(バスケット部2年)はその技量を高く評価され、かいじ国体群馬県選手団の一員に選抜され、チームの中心選手として活躍が期待されております。

全般的にみて満足できる成績とは申せませんが、次年度に向けて躍進すべく努力を続けておりますので、ご声援の程よろしくお願い申し上げます。

各部の主な成績は次のとおりです。

●野球部
秋季大会1回戦、春季大会2回戦、夏季大会2回戦、西毛リーグ優勝、秋季大会ベスト4

●ラグビー部
新人大会ベスト8、県総体ベスト8

国体県予選ベスト8

●サッカー部
新人大会準優勝、県総体ベスト8、全国県予選ベスト8

●バスケット部
新人大会準優勝、県総体準優勝、関東大会(宇都宮)Bブロック優勝、全国県予選準優勝、県強化大会準優勝

●バレーボール部
新人大会ベスト8、県総体ベスト8、全国県予選ベスト8、国体県予選ベスト8

●軟式庭球部
県総体出場、新人大会ベスト8

●陸上競技部
県総体、三段跳5位日隈晃(3年)、3000m障害10位五十嵐敦(3年)、関東大会(群馬)三段跳日隈晃出場、学校対抗、三段跳5位日隈晃(3年)、同6位岸裕司(2年)、110mH6位因直輝(1年)、400mH6位小沢典裕(2年)

●水泳部
県総体出場、新人大会100m自由1位多胡誠久(2年)、同2位高橋仁志(2年)、400mリレー2位

●柔道部
新人大会ベスト16、関東新人県予選ベスト8、県総体ベスト8、全国県予選ベスト16

●剣道部
県総体ベスト8、全国県予選ベスト8、県選手権ベスト8

●硬式庭球部
新人大会ダブルスベスト8(村上・新井組2年)、シングルスベスト8三宅(2年)、同ベスト16関(1年)、ベスト32村上(2年)

●卓球部
県総体ベスト8、全国県予選ベスト16

●弓道部　県総体出場他

●空手道部
県選手権個人3位阿部正孝(3年)、選手権団体ベスト8、県総体ベスト8

●登山部　県総体出場他

●応援部　各種応援他

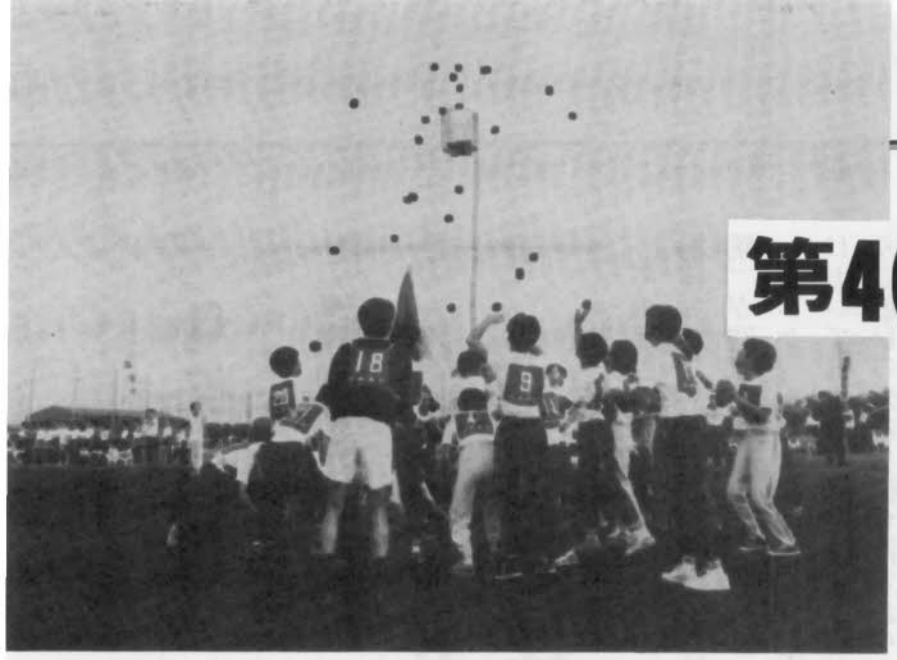
●スキー部　関東県予選22位佐藤雄一(3年)、関東大会出場

(運動部長　中原射鹿止　55回)

翠巒文庫

卒業生の方々の著書で学校へ寄贈してくださったものを図書室に展示しております。それを翠巒文庫と称しております。

●書名	●著者
詩とうたと人間	門倉　訣52回
雪とふきのとう	〃
桑ばたけ―うたう詩集(1)	〃
たんぽぽ―うたう詩集(2)	〃
人間と歌―うたう詩集(3)	〃
けやきと鳩と少年と	〃
名もない花	〃
ひまわりの歌	〃
クウェイト通信	友松　稔49回
海よりの使者	小島英雄旧職
これからの日本	福田赳夫26回
山霊への紀行	金井竹徳
やぶにらみ道祖神	大塚省吾42回
超光速粒子タキオン	本間三郎53回
麻姑の手	小島英男旧職
段落の本	大類雅敏53回
句読点活用辞典	〃
文体としての句読点	〃
そこに句読点を打て	〃
焚書夜話	〃
情報処理	岡田文平46回
のっつけ一号～六号	43回
万葉集の作者とその出典	市川清25回



第40回高高・前高 定期戦

熱く、そして激しく…

V5！

（通算22勝13敗 3引き分け）

種目		陸上	バスケットボール	バレーボール	軟式庭球	卓球	ラグビー	サッカー	柔道	剣道	野球	硬式庭球	弓道	駅伝	綱引き	玉入れ	水泳	ソフトボール	小計	総合
高高	一般	3	4	5	3	2								0	0	0	9	4.5	30.5	78.5
	部	0	6	6	0	6	6	6	6	0	（中止）	6	6						48	
前高	一般	6	5	4	6	7								9	9	9	0	4.5	59.5	77.5
	部	6	0	0	6	0	0	0	0	6		0	0						18	

母校だより

十月三日、俺達は新しい伝説を造った。最終種目による一点差の大逆転、試合終了の笛と共に全員がグランドに雪崩込み、映画のラストシーンのようであった。ほんの一瞬に熱く、激しく、そして誰よりも輝く、それが俺達だ。

（定期戦実行委員長　山田　剛）

◆学芸部報告◆―― 将棋部

佐藤昌明君 将棋全国大会３回戦進出

将棋部は過去全国大会団体三位の実績を持つ。今年の県予選でも、団体は準決勝で高崎工業に敗れたが、個人で二年生の佐藤昌明君が優勝し、全国大会に出場した。

全国大会は八月十四・十五の両日、東京のホテル浦島で大山康晴名人列席のもと行われた。一回戦シードの佐藤君は、二回戦で岡山県津山高校、三回戦で福岡県朝倉高校の選手と対戦した。両対局ともに、佐藤君は得意の四間飛車美濃囲い戦法で臨んだ。二回戦は中盤で相手の疑問手を咎めて快勝したが、三回戦は実力的には互角と思われたが、序盤から作戦負けで敗れてしまった。

現在の高高将棋部は、人数的にも、質的にも、かなり層が厚いので、平素の活動を一層充実させれば、全国の頂点に立つことも夢ではない。部員諸君の奮起を期待する。

（小笠原祐治　75回）

村田鎮虎追悼録　白石明彦69回
萩焼人国記　分部順治27回
分部順治作品集　田中友次郎17回
翠巒の歌　原　一雄29回
歌集鐘の響　沼野鹿之助37回
授業こそわが詩（うた）　冨所隆司53回
テキサス併合史　本間三郎53回
物質の究極　山本捨三旧職
詩歌集海・山・人間　五十嵐徹夫24回
紅葉鮎
造園図面の表現と描法(2)　浜名光彦55回
小人閑居　安藤順夫42回
日本の古代遺跡17　田島桂男51回
古代東国の王者　茜　史朗70回
倭寇と勘合貿易　田中健夫40回
中世対外関係史　〃
島井宗室　〃
中世海外交渉史の研究　〃
対外関係と文化交流　〃
群馬自由民権運動の研究　清水吉二51回
群馬生物教育研究会の歩み　吉田廣雄40回
「華甲」42回同窓会報還暦記念号
粋筆漫歩第一集　福島公夫46回
21世紀への礎　沢渡純夫79回
ビオレッタ・マイ・ブルース　金　鶴泳56回
金鶴泳作品集成　石田英湾54回
元気の革命　田中徳次郎12回
続々城南閑話

最近の進学状況について

過去三年間の進路状況は下表の通りですが、昭和六十一年度の結果は、高高としては平均よりやや良といったところでした。大学進学のみに的を絞り、なりふりかまわず進学に取り組んでいる学校が、年々増加しているという全国的傾向の中にあって、文武両道を標榜するわが高崎高校の現役生は、かなり健闘したと言えるようです。特徴的なことと言えば、例年に比較して、専門学校に進んだり、就職したりする生徒がやや多かったことでしょうか。

漸く定着したかと思われた現行の入試制度が、六十二年度からは姿を変えて、国公立大学の複数受験が可能になりましたが、一部の受験生には有利になっても不利になる者もあって、必ずしも全面的に歓迎できる状態とは言えません。また六十四年度からは新テストが導入され、さらに様変りが予想されます。

このような情勢の中で、高高では全校の職員が一丸となって、全国に通じるような学力を身につけさせ、生徒がその志望を達成できるように努力しております。今後の各位の一層の御鞭撻をお願いいたします。

（進路部長　石沢信久　46回）

進学状況（全日制）

（　）は現役

大学名	59年次	60年次	61年次	大学名	59年次	60年次	61年次
北大	4(1)	6(2)	15(6)	早大	89(19)	59(13)	56(15)
東北大	24(4)	18(5)	20(10)	慶応大	43(12)	35(12)	24(10)
東京大	8(3)	7(4)	6(4)	中央大	45(14)	35(8)	51(15)
一橋大	3(1)	3(2)	6(3)	明治大	57(14)	63(9)	48(11)
東工大	6(2)	2(0)	0(0)	日本大	34(5)	38(10)	54(5)
千葉大	8(1)	6(2)	10(4)	上智大	14(1)	17(4)	19(7)
京都大	6(2)	2(1)	5(2)	法政大	18(2)	27(6)	33(8)
新潟大	11(3)	14(9)	16(11)	立教大	18(1)	15(3)	9(4)
筑波大	7(5)	8(2)	8(3)	東京電機大	7(2)	6(0)	6(2)
金沢大	7(2)	1(0)	5(3)	東京理大	52(7)	32(6)	36(10)
東外大	1(0)	3(2)	1(0)	芝浦工大	5(2)	4(2)	10(5)
群馬大	63(34)	60(29)	46(25)	成蹊大	6(0)	6(4)	5(2)
横国大	5(2)	5(2)	5(1)	学習院大	7(1)	10(1)	5(2)
静岡大	2(2)	1(1)	3(1)	青山学院大	15(6)	16(5)	22(2)
山梨大	1(1)	2(2)	0(0)	武蔵大	4(0)	1(0)	4(1)
埼玉大	7(3)	6(4)	4(3)	同志社大	5(2)	4(2)	4(4)
信州大	7(2)	6(2)	3(1)	立命館大	3(1)	10(3)	4(1)
横浜市大	2(0)	3(2)	0(0)	その他	209(52)	174(39)	194(36)
高経大	24(9)	31(9)	22(6)				

種別合計（全日制）

（　）は現役

大学名	59年次	60年次	61年次
A国立	199(88)	177(79)	181(85)
B公立	45(10)	47(15)	36(10)
C私立	583(130)	512(113)	542(128)
A＋B＋C	827(228)	736(207)	759(223)
D短大，各種，他	4(2)	7(3)	7(7)
総計（延数）	831(230)	743(210)	766(230)
卒業者数	400	405	403
現役進学者数	159	152	164
現役合格率（合格者数／受験者数）	40.9%	40.6%	43.7%

植物改良の原理　上・下　藤巻　宏　56回
改造される植物　〃　〃
世界を変えた作物　〃　〃
与蘭会会報第九号　21回
親馬鹿の記録　上　持田　章　51回
青春の絆―創部35年史―　高高サッカー部
生涯学習にむけて　吉永哲郎　54回

◇　◇　◇

本年七月末日、同窓会副会長岡本正巳氏より、日常お読みの教養書の中から、生徒用にと、百二冊の書籍の御寄贈が、図書室にありました。早速整理をし、生徒の閲覧に供しました。

（吉永哲郎　54回）

岡本正巳氏寄贈図書

昭和60年度高高同窓会経常会計報告

（昭和60年1月～12月）

収入の部

費目	60年度予算	実収入	備考
繰越金	394,505	394,505	
入会金	850,000	860,000	全日制405　通信制25
維持会費	4,200,000	4,617,010	
利息	30,000	64,872	
合計	5,474,505	5,936,387	

支出の部

費目	60年度予算	実支出	備考
会議費	800,000	649,064	総会、理事会、幹事会
祝賀費	400,000	345,930	祝金、卒業証書ケース等
餞別費	150,000	52,000	転出職員へ
慶弔費	80,000	132,400	花輪代、翠嶺育英会祝賀等
通信印刷費	300,000	487,880	ハガキ、切手、振込用紙
旅費	150,000	73,200	京浜同窓会出席等
総会通信印刷費	1,100,000	1,023,778	総会通知等発送
同窓会報費	900,000	915,530	同窓会報編集、印刷
事務費	500,000	475,138	人件費、事務費
同窓会長賞費	100,000	81,450	記念品代
補助費	600,000	600,000	図書館補助、翠嶺体育会補助
雑費	50,000	51,960	ラグビー全国大会出場広告等
予備費	344,505	590,000	タイプリンター（55万）等
同窓会基金へ		200,000	
次年度へ繰越		258,057	
合計	5,474,505	5,936,387	

経常会計・特別会計について上記のとおり報告します。

昭和61年1月21日

高高同窓会会計　高橋千代三
松井　正樹
矢島　哲雄

監査の結果、上記報告に誤りのないことを認めます。

昭和61年1月21日

高高同窓会監査　須永　孝
石井敬之助

昭和61年度高高同窓会経常会計予算案

（昭和61年1月～12月）

収入の部

費目	61年度予算	備考
前年度からの繰越金	258,057	
入会金	850,000	全日制405　通信制20
維持会費	4,500,000	
利息	30,000	
合計	5,638,057	

支出の部

費目	61年度予算	備考　○増△減
会議費	800,000	同
祝賀費	450,000	○　50,000
餞別費	150,000	同
慶弔費	130,000	○　50,000
通信印刷費	300,000	同
旅費	150,000	同
総会通信印刷費	1,100,000	同
同窓会報費	1,000,000	○　100,000
事務費	600,000	○　100,000
同窓会長賞費	100,000	同
補助費	600,000	同
雑費	50,000	同
予備費	208,057	△　136,448
合計	5,638,057	

昭和60年度高高同窓会特別会計（同窓会基金）

（昭和60年1月～12月）

収入の部

費目	実収入
繰越金	6,534,427
利息	283,700
寄付	200,000
60年度経常会計より	200,000
合計	7,218,127

支出の部

なし

残高合計 7,218,127円
（高崎信用金庫西支店定期預金）

※寄付金は下記の2氏によるものです。
茂木三郎氏（35回），貝木栄一氏（39回）

第八五回高高同窓会新年総会へのお誘い

同窓生の皆様には、益々お元気で御活躍のことと思います。

さて、来年度は我々の母校高高も、創立九十周年を迎える記念すべき年でもあります。

高高同窓会新年総会も年々盛況になって来て居りますが、我々当番期一同としましても、記念すべき六十二年度年頭の新年総会の設営を受け持ち、緊張と不安とファイトを併せ抱きながら、準備を進めて居ります。

新年総会懇親会では、先輩も後輩も肩を組んで我々高高同窓生の心の歌である校歌を、翠嶺を、クラス会歌を声高らかに唱おうではありませんか。

懐しい学生時代の数々の想い出に浸れることと思います。

同窓生の皆様、来年一月の新年総会には一人でも多くの御出席を当番期（五十六期）一同心よりお待ちして居ります。

- 期日　六二年一月二四日（土）
- 時間　午後三時
- 場所　高崎ビューホテル
- 会費　四、〇〇〇円

（当番期代表　生方将夫　56回）

◆事務局だより

◎創立九十周年記念事業の募金活動もお蔭様で順調に進んでおりますが、一層の御協力をお願いいたします。

◎記念事業の一環として行われる翠嶺会館の増改築もすべての準備を終え、十一月中に着工する予定です。

◎九十周年記念小史の編集作業は委員七名でこれまでに二十数回の打ち合わせを経て、原稿執筆の段階に入っています。創立以来の数々の出来事を写真を中心にあらわし、読みやすく、しかも歴史的な評価にたえるものをのこそうと苦心しています。

◎同窓会員名簿は来年の五月二十三日に発行の予定です。追加訂正は四月七日まで、広告の原稿締め切りは四月十四日までですので、よろしくお願いします。

◎五十四回及び五十五回の卒業生の皆さんから、それぞれ十五万円のご寄付があり、図書室と吹奏楽部で役立たせていただきました。厚くお礼申し上げます。

◎御多忙中、本会報のために玉稿をお寄せ下さいました方々に深くお礼申し上げます。（本部幹事・校内幹事）

高高同窓会報　第20号
発行日／昭和61年11月30日　発行／高崎高校同窓会　編集／本部幹事会　印刷／グラスロード社